文は信なり

日本クリスチャン・ペンクラブ（略称 JCP）発行・責任者　池田勇人
事務局　〒131-0043　東京都墨田区立花 4-6-13　三浦喜代子方
TEL&FAX　03-3616-8621　郵便振替 00170-0-161838
ホームページアドレス・http://jcp.daa.jp

夏期学校感謝号

喜びのおとずれ　大田正紀

八月四日五日の両日、関西セミナーハウス（京都）で日本クリスチャンペンクラブ二〇一〇年夏期学校が開催された。ご協力いただいた会員のみなさまに心から感謝申し上げます。

開会挨拶で長原武夫氏は、中田てる子姉の証を引きつつ、会の設立の初心に戻って熱心に証を書こうと訴えた。

開会礼拝の池田勇人師は、福音宣教に召された「伝える者の幸い」について説教し、今大会のテーマを宣言された。

講演Ⅰは今関信子先生の著書『命をつなぐ二五〇キロメートル』をめぐるシンポジウム。小川惠子氏、槇尚子氏、藤本優子氏の発題を受けて、事実に基づく創作の醍醐味、テーマの深化・集中、原動力を語られた。

分団協議では、各ブロックの現況と活性化に向けての建設的な提言がなされた。西山純子氏は、静かな口調で、主の愛への深い信頼に支えられた信仰について証をされた。

坂口良彬氏は三〇有余年苦しんだ鬱病の克服を証された。

夕食後は、ゴスペルシンガー与野ひかり氏の特別賛美と証。今回の大会に合わせて「あかし新書」第二八篇「愛・ゆるし・平和」が発刊できた。

久保田暁一先生は、全作品に眼を通され懇切な評言をくださった。

早天礼拝は玉木功師のメッセージ。中国の公認教会の目覚ましい成長ぶりの報告である。地下教会のような「家」の教会しか知らない者には想像を絶する福音の広がりである。

講演Ⅱは、詩人哲学者駒田隆氏の「神の平和」。ワイツゼッカーの「荒野の四〇年」を想起させる、「平和論」である。

三杉富子氏は、留学先で受洗した若者を日本の教会にスムーズに定着させるネットワークづくりに努めている。その一環として「よりいとの会」を紹介された。

講演Ⅲは山本優子先生の左近允考之進の評伝『見はてぬ夢を』の創作秘話。

執筆を熱心に勧められた古賀福武先生ご夫妻の臨席を仰いだ。

盲人教育の道を切り拓いた先駆者の生涯を明らかにされた。三浦綾子の『塩狩峠』に比すべき著作である。

「あかし集」第二八篇を読んで

久保田　暁一

八月四日～五日にかけて行われた日本クリスチャン・ペンクラブの夏期学校は、祝福と恵みのうちに終わった。私は、研究会に向けて作られた「あかし集」を予め読んで出席した。

そして、「あかし集」に寄稿された原稿四十一篇のうち、参加者の原稿を中心にして講評した。

私の見るところ、ペンクラブに入って寄稿している人の力量は全体的に向上しており、大変嬉しかった。

しかし、文章を書く上で大切な事として心がけたいのは、明晰でよく理解される文章であること、自分が訴えたいテーマを、個性的に自分らしく掘り下げて表現すること、その他、物語の展開や適切な題材の選択、描写力、題名の付け方などであり、それらの点に留意して今後も修練を積み重ねて欲しいと思った。

今回の講評において等級のランク付けをする意図はなかったが、特に私が注目したのは、物語性と訴えに富む山本優子の「死んだらあかん」、三杉富子のキリスト教への真正面なアプローチの視点と論点であった。

「あかし集」二八篇の編集を終えて

原田　潔

夏期学校にご参加くださいましたＪＣＰ会員の皆さま。猛暑の中を京都へよくおいでくださいました。お疲れさまでした。

半年前に企画され、まだまだと余裕があるやに思えたのですが、「あかし集」の編集とあいまって、当日プログラムの印刷が出来ていないのには少々慌てました。

施設側のあらかじめ決められた都合もあって、プログラムの変更を余儀なくされ、皆さまには、ご不便をかけることになってしまいました。想定外のことに対しての対処の難しさを体験する事が出来ました。

しかし、内容は講師の先生方の手厚いご準備とわかりやすいお話によって、眼からうろこの取れることを実感し、感謝でいっぱいでした。この想いを疲弊することなく与えられた恵「喜びのおとずれ」を証ししていきたいものです。次回は、少し時間を置いて東京で開催される予定とのことで、小生にとっては、懐かしい都内の風景が眼に浮かびます。楽しみにして準備していきたいと思っています。今回参加を果たせなかった方々も次回には是非ともこの恵を共有したく祈ります。再会と新たな出会いがゆるされますようにと願ってやみません。

暑い夏・熱い夏

小川　恵子

五年ぶりの夏期学校でした。猛暑の最中、三十余名の参加者を与えられ、恵まれた集会でした。皆様のお祈りに感謝申し上げます。

今回は関西ブロックでは初めて『あかし新書』の編集・発行の役目がありました。それで大田理事は責任者、「夏期学校」は原田兄、『あかし新書』は私が担当し、関東との連絡は原田兄にお願いしました。

久保田先生は脚の手術で、退院後はリハビリに励まれ、大田先生はご多忙な上、しばらくご入院なさいました。原田兄も教団・教会・その他でお忙しく、私は眼病に罹りパソコンを長い時間使うことが出来ない有様で、いろんな困難がありました。

でも、不思議に導かれました。

校正を藤本姉が手伝ってくださったので、大いに助かりました。学びを終えて「書くこと」への使命が改めて確認され、意欲が熱くされました。

会場のガラス戸越しの緑と蝉の声に心が和みました。行き届かないこともあったでしょうが、皆様が喜んでくださり、「仕えることの幸い」を味わい感謝いたしております。

（以上関西ブロック）

生かされています　玉木　功

胃がんの全摘出から七年目になります。再発も転移もなく今日まで生かされています。病む人は自分だけが病苦に苛まれていると思い込んでいます。それは間違いです。一人のために多くの人が時間と労力を注いでいます。それは計り知れないものがあります。私がこのように同志と交流ができるのも、原稿を書けるのも、多数の人が祈ってくれているからです。

夏期学校で、ある女性が「お祈りしています」と言われ、聖句『わが助けは天と地を造られた主からくる』をくださいました。残された人生を神に委ねていきたいと我が身に言い聞かせています。

同志の皆様に衷心よりお礼を申し上げます。

感謝の一言　坂口良彬

最初に、今関先生の直球勝負に感謝。「あかし新書」出版に感謝。久し振りに手にしました。駒田兄の落ちついた講演に感謝。詩に磨きがかかりますように。より糸の会のお二人に感謝。若い人たちのリーダーとなって下さい。初めから終わりまでお守り下さった神様に心から感謝。文は信なりを掲げ、十字架のもとに置いてください。

（以上中部ブロック）

よく祈り練られたプログラム　池田勇人

召天者の報により、二日目の朝食後帰らねばならなくなり、皆様申しわけありませんでした。

今回のプログラムの流れ、奉仕者の配置、関西の皆様が何度も会合を重ね、よく備えていてくださったのが感じられました。

三人のコメンテーターの後講師が話す、斬新な試み。　五グループに分かれてのティータイム、各自の関心を共有する幸いな時でした。

開会礼拝の最後に触れた「世界で一番美しい足」（『大人のための韓国現代童話集一』）の話は、臆する弱い足でも、神様が強くしてくださる例証です。

運動会で親子が手を繋いで走る時、小児麻痺で片足不自由だった母親は、途中で走れなくなってしまいます。少年はとっさに母を背負い、走り出しますがビリに・・・。でも校長先生は特別賞で称えます。

「お母さんの手よりも、もっと大事な心の手を掴んで走った」と。

「ヨンジュン、お母さんは今日、世界で一番美しく丈夫な足をプレゼントしてもらって、幸せよ」

「お母さん、大好きだよ」

京都に来てよかった　山本披露武

「京都の夏は暑くてたいへんだ」ということを何度も聞かされていた私は、「夏期学校」が京都で開催されると聞いて、戸惑ってしまいました。

ところが、『あかし新書』のための原稿を関西ブロックに送信したり、進捗状況の問い合わせをしたりしているうちに、「夏期学校」開催のために献身的な働きをされておられる先生方や、諸兄姉の苦労がだんだんわかってきて、「欠席をします」ともいえなくなってしまったのです。

が、なんと、そのようないい加減な気持で出席させていただいた私が、帰りの車中では、「京都に来てよかった」という言葉を連発しているのです。予想をはるかに超えた、すばらしい「夏期学校」だったからでした。

「講演」も、「作品講評」も、そして「証し」もよかったし、よりいとの会の人たちによる「讃美と証し」、それに「グループ別に分かれての交流」もたいへんすばらしく、ほんとうに意義のある、充実した時を持つことができたからでした。

そして今は、暑かったことなどすっかり忘れて、「夏期学校」に出席させていただいたことを心底喜び、感謝しています。

京都で学ぶ　駒田　隆

関西と中部のみなさん、お世話になりました。

二日間の日程でしたが、実り多き二日でした。

「喜びの訪れ」と題しての夏期学校は、そのテーマのように、わたしたちに、イエスの福音が、いかに人々を魅了するかを教えてくれました。よりいとの会の若いみなさんたちの積極的な行動は、使徒たちの伝道はこんなふうに行われたのではないかと、思わずにはおられませんでした。

今、わたしたちに求められているのは、福音を聞くだけでなく、それらを人々に、与えられた賜物によって伝えることではないでしょうか。それは壇上の兄弟姉妹の話の中でも、諸先生のお話の中でも伺うことができました。

幸いわたしたちは、ペン・クラブで、その方法を学ばしてもらっています。あとは、それをいかに実践するかです。一人一人が、それぞれの道で、それぞれの方法で、この「喜びの訪れ」を伝えて、喜びに満ちた平和な世界を作りだしていきたいものです。ありがとうございました。

感謝でいただいた深呼吸　西山純子

受講した関西セミナーハウスの室内は猛暑を忘れてしまうほど、充分に涼しい快適な会場でした。周囲がガラス張りで、見渡せる濃い緑色の樹木と目を上げれば合間に見える真っ青な空と白い雲は、心の底から平安な中に置いていただいている恵みを覚えました。

関西、中部の懐かしい方々との再会、初めての出会い、本当に嬉しかったです。プログラムの一つ一つに主イエス・キリストの愛に満ちた眼差しによって育まれ、今日を与えられている徴があふれていました。

この学びと交わりを機に、与えられた各自の賜物を広い深い賢い視点で把握させていただき、日本クリスチャン・ペンクラブの未来に向けて、さらに祈り希望を合わせて文書伝道していきたいと願います。

二年後には創設六十周年を迎える私たちです。関東ブロック担当となりますが、全国の皆さんと共に、この会に相応しい一段と主の御心にお応えできるものとさせていただけますよう、心から祈り備えの一端をと願っております。

夏期学校　感謝します。

一つになって　槇　尚子

暑い暑い今年の夏、京都も例外ではなかった。比叡山の麓の木々に囲まれた宿舎には、熱い思いと学びが満ちていた。

私は五年ぶりのＪＣＰの会出席に子供のようにどきどきしていた。久しぶりにお会いする先生方や仲間の方々との学びは楽しかった。時を重ねているにもかかわらず、すぐに「あの頃」に帰って行った。関西・中部ブロックの方々の心をこめたご準備があったからこそである。

今回の会場は素晴らしかった。熱海を想わせる蝉の鳴き声、夏の深い緑、遠くの京都の山々とその下の町並み、そして庭に出ると能楽堂と茶室。別世界にいるようなひと時だった。中でも魅かれたのは宿舎に飾られてある数々の絵画だった。これだけのキリスト教絵画を展示してあるのは他にないだろう。まるで美術館の中にいるようだった。

仲間と学びと自然と絵画、それが一つになったのが今回の夏期学校だった。

またお会いしましょう　三浦喜代子

紙面がなくなりました。たくさんの記事を感謝します。　（以上関東ブロック）